独立伝道者　西村　裕さん　　二〇一三年八月二十九日

私より西村さんをよくご存知の方が大勢おられましょうに、感話のご指名をいただいて恐縮しています。主に在る友人の一人として、三つのこと申しあげたいと存じます。

一

まず、西村裕さんの信仰についてです。八月二十三日午後見舞いに伺った時、西村さんは私に彼に正対して座ることを求め、私の顔をじっと見て一語一語かみしめるようにご入院の経緯や、ここ（国立東京病院）は自分の最初の勤務場所であり、最後にまたここに帰ってこられて有難い、診察の結果では余命ひと月と言われていることなどを話され、さらにこう言われました。「これまで病気入院の度に、死に臨む不安と恐れを感じつつもその都度何とかそれをのり越えてきたが、今回はなかなかそれができずに苦しんだ。しかし、『わたしはキリストと共に十字架につけられています、生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです』（ガラテヤ二・19～20）という聖句を想うことによって、疑い迷いの雲がさっとなくなって、晴れわたったように、平安に満たされて感謝した」と。私は厳粛な思いに打たれて深くうなずき、互いにしっかりと目と目を合わせてほほえみ交わしたのでした。彼の請いに従い、私が祈って別れました。

翌二十四日午後、私は妻と共に再度見舞いましたが、その時は既に意識が混濁していて、もう語り合うことはできませんでした。

私は前日に彼が私に懸命に話して下さったのが、西村さんの最後の信仰告白、福音証言であったと信じます。

その信仰に改めて心から敬意を表し、このような恵まれた機会をお与え下さった私どもの主のお取り計らいに深く感謝しています。

二

私は実は西村さんとの個人的交流はそう多くはありませんでした。一番密な往き来があったのは、西村さんが恩師岩隈直先生が原稿で遺していかれた『新約聖書ギリシャ語構文法』の編集・刊行に携わられた折に、ご依頼があって少々のお手伝いをした時です。作業進行中の折々に、この集会室に二つ程机を並べて座り、読み合わせをしたり、校正をしたりしました。ひと休みのお茶の時間には、お互い聖書の学徒としての経験を頒ち合い、楽しく語り合ったことでした。

西村さんの聖書講話は、何よりも恩師岩隈先生直伝の原典講読に基づく甚だ堅実で、しかもわかりやすいものでした。その結実は、彼が心をこめて毎月発行し続けられた『清瀬通信』に見られる通りです。

三

西村さんはこの『新約聖書ギリシャ語構文法』の「あとがき」に著者を紹介して、次のように書いておられます。「岩隈先生は都下清瀬において無教会独立伝道者として召命を受け、以後同地にあって一貫して福音を説き、後輩の育成に意を注がれた」

西村さん自身実に見事に、この師の足跡を踏み、師の負託に応えて、「無教会」の中で決して多くはない独立専心伝道者として、かねてからの願い通り「生涯現役」の九十年を生きぬかれたのでした。

福音伝道中心、しかし世のさま、時のしるしにも絶えずしっかりと目を注ぎ、ヒフコ夫人亡きあとの不自由な生活の中でも変わることなく明るく、いつも大きな声で、坦々と平信徒の日常を生きられた—そのまわりに

自ずと成ったのが「秋津集会」であり、彼らの様々な社会的奉仕活動であったのだと存じます。今こうして彼の野辺送りに当って思いつくのですが、西村さんほど多くの仲間の葬儀の世話をした人はほかにはないだろうということです。

このように、西村さんは私どもに、「無教会主義のキリスト教」に生きること、独立伝道者として生きることの確かな一つのモデルを残して下さいました。感謝は尽きません。

私どもはここに、希望と喜びをもって、西村裕さんを、彼を愛し彼が愛した私どもの主イエス・キリストの御許にお送りしたいと存じます。

（二〇一三年八月二十九日、無教会秋津集会所における告別式にて）

（所載）『東京サマリヤ会会報』第十五号　二〇一三年一二月